

女等が勤めたとして其様な思ふし事をする筈は無れど行衛の知れぬが何寄り氣遣ひお留もか袖も與之吉も秘したならば早く云へ「あゝぬるつこい此奴等を此儘置て逃られて詮儀のつるが切れ果る濁助詔六此奴等をくしれしべれといらだてば元來玉木の氣に入りどもお袖お留をこの日頃口説けど聞ぬ意趣ばらし畏つたト用捨もなく與之吉諸共押倒し高小手に縛めて庭の垣根に結付たり〇梅ヶ枝は梅の樹に首をつりさげ死なんとしつゝ流石に飛も下り兼てさめんと泣き居たりしがあゝ我ながら未練なり南無阿彌陀佛彌陀佛と佛を唱へ眼を塞ぎ足を乗たる捨石を踏外さんとする時に先待玉へと聲を掛け猪名塚のあひより走り出でたる現之助其儘寄りて梅ヶ枝の柳の腰をしつかと抱わげ一息つけばびつくりし梅ヶ枝は身のみおせり「何處の御方か存せぬぞ死なねばならぬ此の身の上情に見捨て下さりませト云ふのも聞ず抱きすくめ片手を延ばして巻帯を枝諸共にもぎ放し強て小蔭にいざなひ行き季下の冠爪田の香よしなき業して己が身に禍受るか知らざればの溺るゝ時手をもて引きあげ助くると事ハ異れど危ふきを見て救はぬハ人に非ず況てや道れぬ因縁ありて身身を此所に救ひしも一方ならぬ神の啓告最前より彼處にて身身の嘆き獨言大方聞取り身を棄る覺悟もあらずし承知せりと云ふ顔梅ヶ枝うちまもり「何處の御方と思ひしにト云ひつゝさつと顔赤らめそいろに嬉しく耻かしくはしたないわの姿わたしのどうせうなんとせうと顔をかくして打伏しつゝ更に涙に呉れけるがおもはゆげにも顔を上げ「わたしが愚痴な縁言を聞きやんしたれば是非もなし前方父の約束ありし遠國の婿がねの今日圖らずも尋ねて来て祝言せうとの事なれば其許を免や斯思ふた事忘れて仕舞ふが道なれど吾こゝろで吾心のまゝにならねば我儘を云ひ通ふさうとはしたれども情ハ不義なり淫奔なり言ひ出したとて出来ぬ事出来ても女の道立

たす實に死ぬより外ハなしさりとて此の世で今一度顔が見度と一念を凝らした故か此の期になつて身目に懸つてわたしの本望さア此の通りの譯なれば放して死なせて下さりませと云ひつゝ泣げ現之助「なるほどそれでハ生さざるまじなれども更に死するに及ばず今となりてハ此方とても秘すに難き吾素姓面目なれど告げ申さん親を撃れ國を追れ約束せし頼みの証も紛失せし故先頃逢ふといへどもいそしく打過ぎたれど某ハ淨瑠璃語などにはあらず身と夫婦の約束ありし佐々木源太左衛門の一子現之助盛春なりと云に梅ヶ枝再び驚き「そんなら宅へござんした現之助といふ婿がねハ「論にも足らぬ紛れ者察する處彼ならんと思ひ當る事のあり某近くに居りながら訪ぬハ身身を嫌ふにあらで外に子細もあるとなれど今宵圖らず神信する天満宮の啓告ありて身の上の事なりとハ心も付す此の所へ態々行ずみ居たりしなり浪花津に逗留の徒然を忘すれんと小舟出させ川せうえ獨酒に深く酔ひ舟の内にて熟酔せし夢にゑならぬちを見れば汝が宿縁のがれぬ者命危き事あり長柄の里云々の所六瓣の花と假寝の正夢覺むる枕にゑならぬ梅が香鼻を通せば酒氣も残らず件の梅は初より一見せんと思ひし名花其方角さへ示させ給ふ神の啓告聊も疑ふ心あらざれば堤に登り舟を返し此の所までたどり來て身身を待と二時斗危き命を救ふといへども朝日丸のみならず預り持し証文奔我相忽より入手に入り赤面の至りなれば長者に對して面目なれど身身を邸へ送り届け其偽物を屈服せさせ追拂はずハあるべからずト云ふを聞く「梅ヶ枝は喜び盛ふる者もなく「そんなら其許が眞實の御様でござんしたか身目もししながら心にも掛すに居たら今頃は紛れ者に肌身を汚し何程悔しくあるべきに淫奔心の起りしも私も年頃信する天神様の矢張お

守り嬉しいく嬉しいト先きに立ちつゝ現之助伴て我家へ歸り行く
 現之助様をんなら天神様の御告ぢやと「いひさへとほせば死に、出た言譯ハ急度立つ梅ヶ
 枝殿あれハそもじの郎ぢやの「つひそこが座敷の庭口こ、からそつゝと入らしやんせト前に
 立ち戸を引き開け「あれ何んとせう恐い人が彼處に居るト梅ヶ枝が驚き恐れ飛退くにぞ現之
 助入替り「怪しき体にて深更にトつと寄てどがむれば「うさんなもんぢアござりやせぬト
 突退け遁るを現之助利腕取て大地に捨伏せ梅ヶ枝が巻帯取りて手早く両手を縛め「大方をも
 じが出た跡へ忍び込んだる小盗賊見遁して善けれもさでハ鼻へ實義薄し糺した上赦さるゝ
 者ならバ放ち遣んト引立れば梅ヶ枝ハ氣味悪さうに側へも寄す「大体ならバそんな者棄て、
 置てさア早う私が居間へト誘引へば此所ハ裏でハござらぬか茲より入てハ禮に欠け痛まぬ腹
 を探られて心よからぬとあらん誰に憚りあるにこそ表の門を叩かざらめト癖者をひつぱりつ
 一再梅ヶ枝に案内させ癖くろ廻りて門前に至りくわいり戸けわしく打叩き「當家の息女の必死
 を救ひ送り來れる者なればはや開け玉へト呼ば、るにぞ梅ヶ枝も諸共にわたしぢやく、早う
 くト急ぎ立る聲紛れ無ければ一義に及ばず門番の下部はさりと扉を開るをとしやおをし
 と現之助梅ヶ枝を前へ入れ曲者を立關口の柱の根本に結び付置き斯と聞きて駈出る忠太夫に
 梅ヶ枝を渡し「委細ハ息女に問ひ給へ女の道を堅く守り傍りの田圃に忍び出で縊れ死なんど
 せられしを靈夢の告げにて豫て待受け危き命を救ふたる 某は遠江引間の浪人佐々木盛春則
 源太左衛門が悻現之助父の仇を復さんと數年果てなき旅にあれぞ故障ありて今日までも當家
 へ音信せざりしを是非に及ばぬ今宵の推參斯と申し入られよと云願守りて忠太夫其許ハどう
 が見た様ナト言ひつゝ心に打うなづき梅ヶ枝の手を取りて其許ハこれにと現之助待せ置て奥

に入りしが久しくありて此方へト小者が案内に現之助導れて長廊下を行廻る其折柄片方な
 る歩障の蔭より駈出る詔六濁助とつこい遣らぬト前後に挟みよりぼうを打振て懸るを盛春驚
 きながらこの何故の狼籍と叫びながらにかいくいり暫時の程ハ働さけるが詔六を投飛し棒を
 奪ひて濁助を足下に踏へて動かさず時に座敷の障子を開き主人の左門ハ梅ヶ枝の襟髪つかん
 で怒りの顔色側に玉木は梅ヶ枝が鼻紙臺の引出持て毒藥の残りの包目の前に差付居る庭にハ
 お留お袖與之吉縛められてうなだれ居たり醫師徳庵ハあたりハ氣を付け忠太夫は現之助を白
 眼んで刀に手を掛けたり時に左門ハ聲振ハし「いつぞや天満の社内にて我は初めて對面すれ
 ど娘とは何頃より密通せしかはるゝと尋ね來りし聲ガねの現之助に毒を盛せ今大膽にも入
 來り紛らはしくも現之助と名乗るおのれはなみくの悪漢とは思ハれず淨瑠璃語とは固より
 偽り我大切なる娘をばおのれよくもそのかし淫奔者になすのみならず夫殺しにさせおつた
 な何事も其胸に覺へのわらう事なれど娘が手元の鼻紙臺も玉木が搜し見たりしに果して毒の
 残りの包秘しありしも遁れぬ天罰侍女も丁稚も同腹死に絶て物言すなりしを待てしらく
 しく身を隠させたる娘を連れ命を助けひなせ入來るこそ火に入る夏虫天の網に覆はれて逃
 度ても逃られず自業自得とあきらめて尋常に縛め受よ欠替のなき一人娘汝ゆゑに首にする心
 の中の口惜さを如何斗かと思ひ居る目前嬌の仇の曲物忽にする時ハ佐々木の後家に言譯な
 し若き者に入れ智恵して情ないと思させをつた切り刻んでも飽はせぬ娘不憐と思へども代官所
 へ訴へて共に刑罰受るの外なしと手ぬるい詔六濁助忠太夫も手傳うて組伏て疾く縛れト涙
 ぐみつゝ齒を鳴らせば仰にも及びませぬト忠太夫も立上る詔六ハ腰の骨擦りながら復打懸
 るなんののおのれと飛す其間に踏れし足ふりのけ尙懸すまに組付を盛春棒にて打惱し詔六が

棒をもとりわけ忠大夫をはつたと睨めつけ「強敵を討取りて親の怨を復さんと心を尽す現之助身達三人五人騒わぎ立つとて手に合べきや偽婚推参せしのみならず毒を服して其物の死したるやうに聞きなされ心得がたき今宵の異變初めて見聞く某を人殺しと言ひ做して搦めんなどいは粗忽千萬冤罪晴れざるそれまでは追出す共此場へ立ぬ誰もく心を鎮め吾語る所をも篤と聞き今宵の始末も委しく語り聞されよ斯ても狼藉せられなば刀の刃のついでに斬散して我死なんト些とも動せぬ面魂眼の配身の構へ自然に威を備へ幾代と戯れしどけなき例の様とへこよなくて天晴武士の人品骨病人々は氣を吞れ顔打守る斗なり現之助は左門に向ひ「さきに天満の社内にて圖らず面を合せながら名をも名乗らであらぬ者に言做し本意なく別れし親を取なく人に討れ證據の短刀をも奪へれ國をさへ追拂はれ未其仇も討得ずして往時のよしみを尋ん事乞力を請ふ爲ならんと思へれんを口惜と母親も常に言ひ某も其心なれば息女の愛鳥をゆくりなく救ふ斗の縁はありて惠の黄金は受ながら賤き者になりとはしたり其上此頃小柄さへ書付をさへ過つてひるがんだうにすりどられ是も縁なき故なるかと打嘆くのみなりしに今宵彼處の中にて梅ヶ枝殿の死を救ひし其時息女の云はるゝを聞けバ摺と偽り入來る紛れ者あるよしを天満神のあらたなる夢の論しに知るといへども父へ夢を信じ給はずされば斯と告るとも目前の證據を信じ吾言葉を用ひ給はじさりとてもあらぬものに身を汚さんこそ世に口惜死ぬより外の道もなしと家を抜け出で名も同じ梅の枝につりさがり縁れんとせられしは一途なる娘心某其處に居り合せ助けたりしも正に是天満宮の靈夢に依り斯て此場の様子を見るに其偽物の毒殺せられ其毒をかひたるは其が業といひ息女と密通したりしと言語同斷の濡衣にて譬へ此儘内々の沙汰にて濟すと言はるゝ共某は承引き難し故

ありて彼の短刀も後再び手に入りつれと鞘ヲ吾手に残り刀は又も人手に渡り其行方知れざりしに證書も小柄も短刀も取揃へて持來れる偽摺こそ其刀の盜賊今少し早からば證據を取つてあらがふとも虚實忽ち分明にて眞に疑念も起さずまじきに息絶へたればわが云事を疑へるゝも理なきにあらぬと眞と偽りの幻と現の如し又氷と水晶の如し偽りの長く保たず眞の久しく變る事なし目前の證據に迷はず理を尋ね非を悟り後悔無き様あらまほし代官所へ愚な事室町所より出でいも黒白を分たん事某が願ひなり察する所子細有つて我を害せんとする仇の方より頼まれし痴漢わが面体さへ知らずして偽物を眞とし早まりて手を下したるならん然るに息女の居られぬを幸として其科をぬりつけ罪なき女子供を苦しめ強て冤罪に陥さんどや某此家へ來る上へ不詳の扱ひ急度させし梅ヶ枝殿も心強く思てござれト現之助傍に目を付睨め廻すに梅ヶ枝も力を得て「最前もす通り昨宵の夢に天神様のありく」と拜まれ給ひ婿なりとて來る者ありとも怪しき奴ぞ益するな人が迫らば身を捨てよ浮む瀬あらんと確な婿論父上に此事を申し度ても又夢をと呪らしやんすへ知れた事それゆゑ何にも言はぬ中果して婿とて來た人のあるに神信彌増り心一ツに婚禮を辞め父上聞き給へず詮方なきに返辭して皆の物にも心をゆるさせ恐さる忌れ小夜中に忍び出でたる長柄田甫縊れて死なうとした時に物陰より立出でいお留めなされし實の吾夫身を捨ててこそ浮む瀬と浮告の有りしも此事かと骨身に染て尊き利益初めて逢ふた吾夫なれどたどひ疾より物言ふて居たにもせい親様同士結ばせ給ふ妹背の交それを隠して偽物をだまつて殺すに餘り阿呆積つても見やしやんせといふに玉木ひむしやくしや腹「娘に逢はずべちやくちやと左門様斗でない勝手づくの夢の告偽の譬の幻より一倍増の夢話しわしもさらく取り擧ぬしやんと注文揃ふたる現之助が偽物

で何一証據の無い何處の馬の骨やら知れぬ淨瑠璃語が言名付の婿と誰が實とせう其男に
 覺へが無くても毒を包んだ此紙を自分手許に隠し置き知らぬで濟ふか淫奔女大膽おまど罵れ
 ば「母様何と仰やつても些とも覺へのない其品錠の無い其引出し私の居らぬ其間に誰が入れ
 まいものでもなしそれを私のした業と極るハ餘りお情ないせうでもしらぬ覺へはない「否々
 覺へないと言へせぬ實を白状させいでばさアこれでもか〜と玉木ハ梅ヶ枝引付て顔を曇
 にすりつけ〜打つつめつ〜さいなめば「如何程も責めさんせ冤罪に陥る私ぢやないト跡を
 打任せ苦痛を忍ぶ左門ハ玉木を押隔て「手荒くせずとも事わ分る責るなら女共や丁稚を責て
 白するが近路なりト娘をかバへバ忠太夫進み出で「拙者つく〜思案致すに死ありしが偽
 物にて茲にござるが眞らしけれと左様致せば毒害をさつしやらう道理なし此の御方を偽物に
 すると一旦身を潜させられしお嬢さまを態々と詮議の真中へ連れ來り何んば盜賊たけ〜しく
 とも何處迄も出て譯たてうと惡落着も不審千萬加之ならず玄關に結付置れし曲者ハ彼ハ又何
 者にて何用ありて連れられしと訝しめば現之助「彼奴ハ最前此の邸の裏手のにて見付し故此
 の家を伺ふ盜賊か見逃し難しと捕へたるが今宵の異變を伺ひ見るに彼奴も茲に用あるものか
 引出して責問れよト云へば實にもと忠太夫廻へ廻りさせ詔六濁助に言付て棒喰へせて此の邸
 に忍び入りし子細を問ふに「あゝ歐たすとも斯なつてハ隠しハせぬ番頭さん私ハ此家の花婿
 さまに些と用事があつて來たもの「何と申す此家の婿にト現之助が屹と視れば「いや〜己
 を縛つたな前に何の用があるものか晝ござつた婿の事もちやつと呼んで下さいやしト落着顔
 に人々不審し其の現之助不慮に死に失せ是に依りて家内の騒動「そんならあの婿殿が死なし
 やつたといこりやならぬト細付の儘逃んとすれば遣すな遣るなと人々取巻き愈々怪しい盜賊

奴有体に吐しをれと頻に打てば「こりや堪らぬ白ひます〜申します何を秘さう私は梅田の
 非人で名ハ無九郎今日珍らしう小判が手に入り持病が發つて奕遊び負て裸躰に成小路震へ乍
 の渡船場邊ぶらつく中に此邸庭口の開て居たので俄然に兆した出來思案今宵婚禮の騒ぎに紛
 れ最一勝負の資本位は稼いで立ようと這入たも若ししめられたら婚様に口開せらとそれが頼
 み當にした彼惡漢にぞねられてハおだぶつおてちんそで無事ハせぬ者ぢや乞食に朱碗位負一
 夜檢校と云は聞と一日長者は些新手段惡漢ハ幻とて我等の仲間の非人尤元は猪名寺村の
 笹原とやら云金持の孫兒おまをば責殺した其祟で家斷絶遂に乞食の仲間入此家の前の御新造
 は實の伯母子てありながら面出しもならぬ身の上と云事は兼て聞く又今日の咄では集めると
 もなく不思議にも道具の揃ふも一つの縁言名付の婿と偽り長者の跡を取る計略首尾よくやつ
 たら己をも浮ませて遣るとの約束ちとうますぎると案じたがあれはど壯健で居た男ころりと
 やつたハ唯ではあるまいと云て吟味もならぬのは此方もあやの抜けぬ辨何んにも云はねばち
 リッば一本曲げぬに腕を後〜曲られ痛い目見たに腹をいやし此處許して下さりませト打明語
 れば人々は呆れて互ひに顔見合せ淺ましき云ん方なし左門太き息をつき「儲は彼が吾妻の弟
 籍四郎が一子なるかわられぬ者となるうへにも巧事して非業の最期自ら成せる禍ながら俗
 もむつでが怨念の消へ失せぬ故なるかと左門が歎けば現之助「さては不慮の事共なりさばれ
 吾提へ置きし惡黨の白状にて偽物の素性明に顯はれ我面木を起すに堪へたり斯ても眞と偽
 に迷ひ給は遠州へ人相替を遣はして問ひ合せさせ給ふべし證據を待す明白ならん此の程假
 の住居とするハ家來筋の者の娘程遠らぬ會根崎新地に歌妓となり罷在り此者實意を盡すに依
 りそれが主人千鳥屋の隠居所の奥を借受たり以前老松の社に際り明家に住ひしみぎり賊の手

より買取りしが住吉難波薬屋の後家お瘤と云者が朝日丸を持しを見付詮議を遂んと追掛しに
 廣田の社の森蔭にて件の後家の人に殺され早くも刀は人手に渡り鞘斗遺りしが其時怪しきで
 たちのものわきばさみたるものよりして刃の光り洩れしかば引捕へしが復人に妨げられても
 のわかれ其時の曲者は其幻にてありけるか今我帯する差添の鞘へ 則 其鞘なれば幻が持参
 の身を納めなばしつくり合ん我の仇を尋ぬる身の上母の行衛を失ひ一日として安逸に身を持
 なさん心なければ本意を達せん上へ格別息女を嫁に請得る共家だに持ぬ浮浪人梅ヶ枝殿さへ
 得心ならば我名をかたる曲物ありと知るともよそに見過ぐさん貞女を立て、命を惜まぬ志
 を感ずる餘り枉て當家に足踏し息女を送り届けし某詮議すべき紛れ者毒害する阿呆が有う
 か各惑ひを解き給へと言放てば最前より玉木の胸を躍せ乍「驚を鳥と言枉げてもわしに
 さつはり合点がゆかぬ其無九郎と云奴も其方達と同類で言合せやら何んぢやいら最些と責す
 へ實を吐くまい暗六潤助手酷くぶて罵れば「こりやあんまり無体仲間斗か韻まで誰も
 能く知るあの 幻 虚言を吐てよいもかの聞譯の無い浮新造と叫べば暫時と忠太夫「語六等扣
 へて居やれ簡程體に申す上へ無九郎も虚言も言は後とさつた婿君も實に佐々木の傍子息
 ならんされば婿君の虚實明らかになるといへど毒殺の本人顯へれず此上へ互ひの面晴且那浮
 夫婦上下の男女一人も残らず熊野のぞわう「勿体ないが戴いて心の潔白顯へすが成程至極よ
 い言譯玉木どうぢやト左門に云れ「悪事を秘せば神罰にて血を吐くとやら聞て居れど世
 へ末世なり覺束ない一人も残らず無事ならばひよんなものでござんせう去年飲ぬと云へ疑
 ひ受て益も無し忠太夫ぞわらの用意早うくと云ひ乍よもやと思へど心の轉倒露れな命
 も危し猶豫ひ居るべき場所にあらすとつと立て奥へ入り自分小簞筒の扉を開き八重鏡差し

たる引出しの底より小さき壺取出し蓄へ残せる毒薬を持来りて壺司の釜と水差へ打わけつゝ
 壺をば布呂の灰に埋み左門の居間に駈行て手許の黄金の袋を奪ひ取り廊下を廻り奥庭へ出で
 彼の梅ヶ枝が開け置きし路次口潜りて外面へ出で大仁村へぞ駈行きける此の時に忠太夫のお
 袖等三人の縛を宥し設多の男女を一間に呼び寄せ左門へ神棚に納めたるをわうを出させ井
 水を汲せて用意調ひけるに玉木が居らねば侍女を居間へ遣りて捜さするに物打散らして其景
 状怪し忠太夫へ兼てより眼を注げ居ることなれば左門が居間に駈入り見るに手許の黄金悉皆
 失たれバ斯と告るに人々へ又立騒ぎ残りなく捜せと遂に行衛知れず忠太夫へ左門に對ひ「事
 の子細へ知らされど毒害へ浮新造の業ならで誰ならんよく思ひ慮り給へと云ふに漸く心
 づき怒り立ち玉木が文庫捜し見るに大仁坊が贈りし手紙も出で来れり姦通の次第さへ紛
 れなく露れぬれば人々の異口に玉木を罵り誇らぬなし梅ヶ枝始めて活たる心地心緩めばつ
 かへのさしこみ最も苦く覺へければ合薬の丸薬をお留に言付取出さすればお袖の毒の在り共
 知らで壺司の白湯を湯呑に汲取り持て来て側に差置きぬ此時に梅ヶ枝の居間に飼置る鶯の
 夜の啼ぬ鳥なるに忽ち高く聲を發し物狂はしげに幾聲とも限りも知らず啼き續けはたさし
 げく騒ぎ立ち籠もくづる斗なれば梅ヶ枝は手に取りし薬も差置き身を起し「まアあの聲ハ
 ト驚けばお袖お留も「初草さんが「何におぢたか氣遣ひしいトいひさま頓て駈行きて猫やい
 たちがおぢしに來た様子も無いに合点の行ぬトみづしに立寄り籠の覆ひお袖は取んと手を掛
 るに心急く過つて驚ひながらに 鶯 籠柵より下へ轉ばすに籠の戸開きて飛び出る鶯へあれ
 くく云ふ間に此方の座敷に移り梅ヶ枝が膝元なる湯呑の白湯に口をつつけ暫時の間吸ふ
 程に烈しき毒の入りたれば忽に氣色變りはぶしを振りしきりと廻ると等く血を吐きて忽

よ買取りしか住吉離波薬屋の後家お瘤と云者が朝日丸を持しを見付詮議を遂んと追掛しに
 廣田の社の森蔭にて件の後家の人に殺され早くも刀は人手に渡り鞘斗遺りしが其時怪しきで
 たちのものわさばさみたるものよりして刃の光り洩れしかば引捕へしが復人に妨げられて
 のわかれ其時の曲者は其幻にてありけるか今我帯する差添の鞘ハ 則 其鞘なれば幻が持参
 の身を納めなばしつくり合ん我ハ仇を尋ぬる身の上母の行跡を失ひ一日として安逸に身を持
 なさん心なれば本意を達せん上ハ格別息女を嫁に請得る共家元に持ぬ浮浪人梅ヶ枝殿さへ
 得心ならば我名をかたる曲物ありと知るともよそに見過ぐさん貞女を立て命を惜まぬ志
 を感ずる餘り枉て當家に足踏し息女を送り届けし某詮議すべき紛れ者毒害する阿呆が有う
 か各惑ひを解き給へと言放てハ最前より玉木ハ胸を離せ乍ハ鷲を鳥と言在けてもわしにハ
 さつはり合点がゆかぬ其無九郎と云奴も其方達と同類で言合せやら何んぢやハ最些と賈す
 ハ實を吐くまい暗六濁助手酷くぶてハ罵ればハこりやあんまり無体仲間斗か暗までハ誰も
 能く知るあの幻虚言を吐てよいもかの聞譯の無い新造と叫べハ暫時と忠太夫ハ詔六等扣
 へて居やれ簡程儘に申す上ハ無九郎も虚言も言はハ後にござつた婿君も實に佐々木の浮子息
 ならんされば婿君の虚實明らかになるといハ毒殺の本人顯れず此上ハ互ひの面晴旦那浮
 夫婦上下の男女一人も残らず熊野のそわうハ勿体ないが殺いて心の潔白願ハすが成程至極よ
 い言譯玉木どうぢやハ左門ハ云ハれハ惡事を秘せば神罰にて血を吐くとやら聞てハ居れハ世
 ハ末世なり覺束ない一人も残らず無事ならばひよんなものでござんせう去年飲ぬと云ハ疑
 ひ受て益も無し忠太夫とわりの用意早うハと云ハ乍よもやと思ハ心ハ轉倒ハ露れハ命
 も危し猶探ひ居るべき場所にあらずとつと立て與ハ入り自分小籠筒の扉を開きハ重籠差し

たる引出しの底より小さき壺取出し蓄へ残せる毒薬を持來りて壺司の釜と水差ハ打わけつハ
 壺をば布呂の灰に埋み左門の居間に駈行て手許の黄金の袋を奪ひ取り廊下を廻り奥庭ハ出で
 彼の梅ヶ枝が開け置きし路次口潜りて外面ハ出で大仁村ハぞ駈行さける此の時に忠太夫ハお
 袖等三人の縛を宥し設多の男女を一間に呼び寄せ左門ハ神棚に納めたるをわうを出させ井
 水を汲せて用意調ひけるに玉木が居らねば侍女を居間ハ遣りて捜さするに物打散らして其景
 状怪し忠太夫ハ兼てより眼を注け居ることなれば左門が居間に駈入り見るに手許の黄金悉皆
 失たれハ斯と告るに人々ハ又立騒ぎ残りなく捜せと遂に行衛知れず忠太夫ハ左門に對ハ「事
 の子細ハ知らざれと毒害ハ新造の業ならで誰ならんよくハ思ひ慮り給へと云ハ漸く心
 づき怒り立ち玉木が文庫捜し見るに大仁坊が贈りし手紙ども出で來れり姦通の次第さハ紛
 れなく露れぬれば人々ハ異口に玉木を罵り誇らぬハなし梅ヶ枝始めて活たる心地心緩めばつ
 かハのさしこみ最も苦く覺へければ合薬の丸薬をお留に言付取出さすればお袖ハ毒の在り共
 知らで壺司の白湯を湯呑に汲取り持て來て側に差置きぬ此時に梅ヶ枝の居間に飼置く鷲の
 夜ハ啼ぬ鳥なるに忽ち高く聲を發し物狂はしげに幾聲とも限りも知らず啼き續けはたさし
 げく騒ぎ立ち籠もくづるハ斗なれば梅ヶ枝は手に取りし薬も差指さ身を起し「まアあの聲ハ
 ト驚けばお袖お留も「初草さんが「何におぢたか氣遣ハしいトいひさま頓て駈行きて猫やい
 たちがおどしに來た様子も無いに合点の行ぬトみづしに立寄り籠の覆ひお袖は取んと手を掛
 るに心急く憊過つて尻ひながらに鷲籠細より下ハ轉ばすに籠の戸開きて飛び出る鷲ハわれ
 くハと云ハ間に此方の座敷に移り梅ヶ枝が膝元なる湯呑の白湯に口をつけ暫時の間吸ふ
 程に烈しき毒の入りたれば忽に氣色變りはぶしを振りしきりハと廻ると等く血を吐きて忽

に落ちければ梅ヶ枝は手に乗せて「はれあがつて毛色も變りむごらしい此姿をんならば此白湯にも毒が有たか恐ろしやト呆る顔に侍女共其余の者も身の毛立ちわなしく中に醫師徳老「御愛鳥の不意に來り梅ヶ枝様の召る白湯を我先吸て即死せし命を棄て、毒あるを知らせたるかと思しくて例も聞ぬ小鳥の靈異紛れ當りとする時は又神佛の御加護ならんさて此白湯に毒ある上へ飲食一つも猥りに箸を付給ふ可らず毒の有無を糺すまでは珊瑚樹を一々にかざして玉の破れざれば毒なしと知り食し玉へ先疾く件の白湯をたへし釜を取棄て給へト云に左門は面を土にしつゝ珊瑚樹を一粒宛總ての者に分ち與へ夫より釜を詣六と濁助に言付て明地へ運び出さするに椽側より庭へ出しが飛石につまつき釜取落せば毒湯のこぼれ手足を濡すのみならずたばしるしづくの面に懸り髪に挟みし珊瑚樹は二つに碎け飛散りつゝ毒の懸れる所々はれあかりて痛みに堪へずからん釜を外へ出し己が伏戸へ退きけり徳老は先井の水を汲ませ見るに常に變らず食物悉く改むるに水差と釜の外に毒あらざれば左門を始め人々始めて安堵しつ此時に早夜ハ明つ梅ヶ枝ハ初草が騒ぎて籠をり出でしハ全く吾危きに臨み身代りに立たるなりと怪しむ最怪しく不便さハ限りもなし左門今ハ能く悟り現之助を紛れなき吾婿なりと心を隔てず偽物に感ひしを詫び娘に女の道を守らせ眞の夫に助けさせ給ひし實に神の利益ならんと喜ぶに付後妻の不義奸惡を惡み疎み彼吾婿を害せんとするハ密夫法師のさする業が大仁と云ふ僧に恨みを受る覺やあると尋ねるに「その爲樂寺の住持ならん有驗の聖人も敬ひ某も云々の事ありて今日が日まで信じ尊み候ひしにさてハ俗僧にありけるか思ふに仇の一味ならん引捕へて詮議せば仇の在所も明白ならんト痴助に案内せさせ爲樂寺へと駈行くに早明寺となり居たり左門も數多人を走せよもやもを捜させけれと二

人の行衛かつて知れず現之助も本意なく歸りぬ此の跡にて幻を菩提寺に轉らせ無九郎ハ向後を戒め物を施し追放ち此上ハ現之助と梅ヶ枝の婚禮を翌日執行ハんと云ふに現之助ハ梅ヶ枝が切なる想ひを汲み知れぬ流を立る幾代の義心背くハ人にて人ならずと親の容せし交なれと速にハ承引す首尾よく仇を打果せし上ならでハと云ひ通すに梅ヶ枝ハ斯と聞き望を失ひ人知らぬ涙にぞ伏沈みける左門も斯まで辞むを強てとも云ひ兼て「たのみの証の朝日丸ハ離れし身鞘も時有てしつくりハまれと妹と脊ハ二見の浦に立石の併ひ乍も伊勢の海鮑の貝の片思ひ世に不束なる娘故嫌ハるハなら力なしとて亡き親へ不孝とあらハ其意を得ず其親人の某に請ハれし嫁の事なれば肯むハ却て孝ならし其ハ兎も角もこれまでの曾根崎とも故郷にあらす同じ旅の宿りならば盃せずとも妻の親舅の家ハ我家なり此の長柄に何時までも心おきなく逗留あれそれにまだ用心の事を忘れて言ハざりし身が母身ハ與之吉が家に身を寄せ居らるハ様子名塩と云ふ山里にて一日路にて行着るれば明日にも人を遣はして呼び迎へんと云ひければ現之助は驚ろき喜ぶ春は花と諸共に運も開け所願も充んと天満宮の御示現ありしも想ひ出で嬉しけれと母上のお在しませば尙是彼に障多く容易く幾代に會難からん唯此所を立去るこそよけれと思ふに梅ヶ枝が輝なる姿心根の優しきも亦惡くからず且は母さへ招ばんと云ふに人の實意を振り棄て背き果るも人ならず兎も角も先幾代に會ハ胸の裏を定めんとて「兎ても長くは此所に留る可くは候はねと暫時は仰せに従ひずさんされば此由千鳥屋に告ずは尋ねて居り候ハん舅の邸へ移る由彼處へ告て散し置く身のまはりも一つに纏め引越すべしと其日の八ッ過ぎ颯川へ立歸へるに一人は遣らぬと伴させし供は下部の痴助が椽側にてつくりと坐りて眞向の眞面目顔入る幾代はしろく見やりてすつと上るや否や

一代さん火を取りておいでをくともよくいけるのぢやまア〜ぬしは昨夜からト嘴も衝くべき勢ひに現之助は痴助が手前を憚り幾代の手を引き横間の窓の下へ連行き「おりやまア飛んだ事が出来た」碌な事でござんすまい紅葉さんの歸りは四ッ過ぎ未座敷も有たれどおかししい別をしたのでむしやくしやと氣が重く寝た處がぬしは歸らず船頭衆に聞いたれ長柄田浦で湯殿を頂いたと今朝も云ふ何時か天満で金呉た長者は長柄でいやらしい目つきをしたお嬢さんぬしも心があるゆゑに若ひかされて往たかと長柄と聞ば胸悪くワ一代か火のよいがわたしやせうせう煙管さへ忘れてきたと現之助が腰を探りて煙草入抜き出して一服吸ひつけ「飛んだ事とは何んの事一夜泊つたのみならず仲間と云ふ様な奴さんを伴て来たは付馬とやらでもあるまいわたくしも海山氣のもめる事があれどもまアぬしの方から云ふて聞せてト案じに暮るればと息をつき「何にも飛たると云ふでもないがまアとふにせいとばぬにせいもう〜歸らしやんしさへすれがよいと云ふものト云ひつゝ又も一服吸ひ付男の口に差寄すれば「毒見が濟んだら大丈夫なに己が煙草ぢやものをいやもう昨夜の毒殺の連累で一と目も寝すまア秘しめぬ斯云ふ譯と夢の告にて梅ヶ枝を助けしより婚姻を辞みしまでの次第を語り「此通りの仕誼なれば此の假住をもかくされずさへあれ眞實梅ヶ枝に其方を見替る心ならず彼方へ移り住んと言ひしも一旦の心安め逃れ出んに離からずされば今日より暫時の程彼處に逗留する了管と云へ其方が納得をせぬのを無理にと云ひのせぬト云ふに幾代は早目を濕まし「どうとも勝手に遊ばしませト打腹立しか又しほれ「今更云ふにも及ばぬ私親御宗七さまは源太左衛門さまの湯氣に入り海山湯恩を受た上商人が所望ぢやとお暇を頂いて沙界の津にて唐物商買相應の身代なりしが山ごとと身を果し私を此處へ賣て置き其後行衛の知れぬども博

多とやらにござんすと九州の客の咄汝令どうして暮すとも初に受た湯恩は山々其娘はわたしなればぬしのお世話し家にて何んな我儘さしやんせうと悪い顔のせぬ等ながら元惚れたのが縁の初め他の女に見えられ何う堪忍がなるものか寧ろ殺して下さんせえ口惜いトはら〜涙「事を分けて居りながらさう逆せると其方に似合ぬそれぢやに依りて「否を断りてせぬでいなか「したのかせぬのか見て居るゝ何うなりとさやしやんせ折も折とて紅葉と云ふ客人は室の津の實の同じ商賣や虚輝やとやら親方此の邊へよい子供衆を抱へに來たので私をばよい直段で買ふて行くと相談も九分九厘昨夜の中に極つたと「何んと云やる其方をば「室の津へ遣といな氣もめい何んとせうまアすくなくも百兩から無くて何物が云はれま〜いと秋さんも親切に云ふてなれとむせかへる「泣きやるも尤己も當惑戀の意氣地の張合ならぬ尋常ならぬ二人の交長柄の一條ある上いよく遠くへ住替へさせ見て居てハ犬畜生情死して死ぬれ者を阿呆者のゆきとまりと笑たれども今の身に取れてハ無理トハ思はれず眞に金さへあればナア金が仇の世の中にはんへんにみふなといふ柔紙斗りでに百兩處か五兩も出來まい其才覺の智慧貸そか智慧を貸そかト下窓より首差入るゝは箱廻し「興七どんかなんぢやいなしやれ所ではござんせぬ「否極眞面目で貸したい智慧は霞に月のできあひならすちよつくらちよつと其耳をト無理に幾代へ稍久しく叫けバ莞爾と笑ひ出來さうもない狂言なれどほんまに死んでも厭はぬ私まア斯でござんすト小聲に語れバ現之助「成程是は善い思案と云ひ度があふないものと云ひながら手を束ね其方を室へは是非遣られすてんはのかは其通りやつて見ようと尙三人細々と語り合ひ暫く盃廻らす程に早くも初夜に及びければ身のまはりの物取集め痴助に持せ道を急ぎ長柄の里へぞ移りける○櫻木はゆくりなく父の恵みし黄

金を以て其身を償ふ事を得つれば朔左衛門の死骸は古籠に載せ人夫を備ひかゝせて名蓋へ送らせつ櫻木も諸共に付添ひて行く可りしを不用の衣類を賣代なし着替を包みなせする程に一時斗後れれば珍五郎は氣作に言ひ付包をかつがせて送らせつ難波新地を出でたる頃は己に七ツの鐘も鳴れど明日は日柄の善からねば尼ヶ崎までなりとも踏出して泊るべしとさしも路をば急がぬに渡船場毎に時間さへとり神崎が好き程の宿り時刻にありけるを氣作が道を知り自漫大物の旅宿屋に知人あればそれまでと前に立てわきひらすじ足に任せて行く程に今福村の近邊にて南と西を取り違へ二里斗も行き過ぎて己に日暮れ果てたるに尼ヶ崎へは行き着す村名を問へば塚口村とて山に近き寒村にて何時しか海は遠くなりぬ是はと斗呆れ果て頭を掻けば櫻木も腹を立てて返つて返らず折悪雨さへ荒く降り出で雨具をも持たざればつぶやま竹垣高く結へる邸の門前に立寄りて雨を凌ぐに速に止むべき景もなし村とは此邊は此邸の外近くには賤が伏家も見へざれば心細げに佇め居るに門のくゞりをひらりと開き「遠慮に及ばぬ此方へ入りて休息あれと若黨らしき男のいふに従ひて入りて見れば見掛に似ぬ新しき家のあり汚からず住なしたれと人氣稀なる状なるに氣作は心に怪みて「私共は有馬の方へ往くとて路を迷ふた物見す知らずの旅人にさねんごなる御言葉を頂ぐ地獄て佛此所へまア何方様の御邸でござります「此家へ荒木の御下邸なれども久しく荒て居たのを新規に召抱へになつた此方の主人の芥膳様が長屋を御拜領お座敷まはりを建て添へてかたの如く住られたれと有馬へ沙供でお留主故此の通り宵から響しひ其整しいを合点なら叱手はない一宿あれと櫻木に見惚ながらさも懇に勧むるにいよく怪しと思ひながらも行前知れぬ眞の問漏れて野宿のなるべきならねばさらば一夜の沙無心をト云ふに喜び留主守は離れ座敷に案内し

つ自毒の試みして酒飲せ夜食を饗應し勝手に寂りと寝やしやれと取出したる夜着襦袢ぬ布團に船底の枕に心も落着で氣作は首のみ傾くれ櫻木へ娘氣の深くも案じすうちつろぎ疲も出で睡氣さし疊める布團に寄り懸る此時門の方に當り人音すれば留主守へ此の所を起て行つ何者の來たるかと櫻木氣作に目配せし聽耳立るに門を開け馬を引入るゝ機にて跡藏箱介なぞ呼ぶ人の名は聞取れども何事を云ふとも知れず三人斗の聲のしけるが暫くして音もせず氣作はわぢく小ひさくなり何んでも此家へ盜賊の巢今に縛るか斬り殺すか剝るゝ位で濟めばよいが本を云へば此方の粗忽路を違へたつかりで貴方までも虎の穴龍の淵へはめたと思へばどうもお詫の仕様が無く「ゑゝおかしやんせ此の場に至り叱つたとして恨んだと何んのましよくにあふものか然し五人や十人はどうともして投げ潰さう力のつゝかぬ其時は殺されて死ぬ分の事ア靜にして居やしやんせト氣作を諫め櫻木は眠むれる状して伺ひ居るに雨も何時しか降り止みて梁の鼠騒ぐのみ風の音さへせさりけり斯て其夜も稍更るに彼留主守は跡藏とて好色の痴漢なれば櫻木を唯優柔なる女とおもひ引入れ置きいざや行きて快しまんと離れ座敷へ赴きて先大刀を疊に突き立て矢庭に氣作を引起し捻じつくるを櫻木は此の狼藉なり何故にとつかど立つて跡藏の肩先つまんで引退くれば倒ふれんとして踏み留まり「何故と野暮なやつそもじが肌篋の雪賞罰するに邪魔になる奴豆腐をつまみだすにいや何故とは分らぬ子ださうじう面を作つても矢張可愛片笑窪低い處に水溜る供奴は唾でも飲んで居ろ己の腹ざり御馳走にあへねばならぬトしなだれよれゑゝ汚らしい何にしやると言ひさす引寄せひつかつぎ力に任せて投付れば突立て置たる刃の上へ逆さになつて落かゝり脾腹を深くつんざくのみか頭を柱に打付て鉢を碎きて息絶へぬ隠れて居る盜賊の大勢あつてハ事六

かし遣れらるゝなら此の際にと片手を包片手に、氣作の手を引き座敷を出るに遙隔る明長屋に男女の争ひ罵る聲手に取る如く聞ゆるにぞ櫻木は耳をそばだて聞けば女は覺へのある聲あゝ誰やらと考へ、櫻木は立去り兼ね氣作が止むるを振り拂ひ其方を差して行き見れば燈闌き一間の中に組んづ解れつ争ふ二人差覗くに男は知らぬ女は有馬のお蔭なれば夢の様なる心地ながら寸の間も猶豫はすつと入りて男を押退け「お蔭さんか櫻木ぢや有馬で會ふた櫻木ぢやと云ふに彼方も起き直るを駈寄りて撫で探り何處も怪我は無いかなといたわることたに曲者が何奴なれば横いから妨げするト取て掛るを手玉の如く四五間投遣り「神祕になつたと聞たお前は何うして此所に居て「愛目に逢ふも久しい間此の通り尋せさらばひ幽霊の横なれど死なれぬもつれない命まアそれよりも案じるは渚さまと十三さん敵に奪れ馬に付られ箱介と云ふあの悪漢此處まで持込物置へ入れて置たと彼か話し「そんならあのお二人さん其物置は何處ぢやとらうくしたる後からあのれ女め眞二つと何時の間にか箱介が起上つて斬込身身を避くれば勢ひ余りよろめく弱腰足もて蹴飛し刀もぎとり踏みすへくぐりにやりとなれるを引起し肩先つかんで大地をひきすり物置の案内をせさせ邊りを見れば恰も好し最前馬子が馬荷をゆへし麻繩忘れ置しかば是をしさきて氣作に言ひ付け箱介を縛めさせ最前馬の足音せしはこれなりけりと始めて悟り物置の戸を打破るに果して一荷のこもづゝみ持來りたる箱介が刀もて繩斬解き蓋はね退くれれば十三郎渚も共に轉び出るをまア「涉無事は何寄とお蔭も手傳ひ縛め解き棄て始めの座敷へいたはり連行き勝手より湯を取寄せ薬を與へ介抱するに二人も漸く氣力を生じ櫻木殿なりお蔭なり是は夢かと喜ぶにも共にお蔭の身上を先怪しみて問ひ掛るに「語るも悲しひ長の艱難此家の主人石川芥膳湯治の折に私をば口

説ても聞かぬ故其後道に人を伏せ置き勾引して連來り云ふ事を聞け従へと教しつ嘸しつはてハ責め鞭打るゝ切なさ口悔さ刀物を盗み自害をしたれを留られて死に損なひ十死一生を芥膳の醫者の上りと云ふ事で療治に委しく様々と手を尽せども身を棄て、薬も飲まず養生せず夫故に九月からこの三月まで疵口の癒らぬもつつけの幸身を汚さず居た嬉しさ折柄殿のお供とやらで又有馬の今ハ留主あの長屋の一間を仕切り日の目も見せぬ座敷牢をこへ今宵あの箱介歸つて來て十三郎其伯母も囚人となし旦那より先へ歸り二人をバ馬荷の儘物置へ入れて置た十三ハ其方の情夫と云ふ事も旦那ハ知つて居る目の前で十三を責めそつちを口説き落す巧計其愛目を見るよりも兼て己も惚て居ればうんと言は二人とも助けて遣るまいものでもなし手扱した褒美に呉れた朝日丸と云ふ刀を住吉で人に賣り金にしたのをあとから云ひ出さるゝも氣ふつさいよいころに足を擧げ一人で稼ぐ了管故連て立退き女房としたい事をさせておくまア其きめを此所でせうと嫌がる者を病みはうげた病人捕へて無理斗人に肌身を汚すなら斯な難儀ハ仕て居ぬと力の限りあらがうても最早遅れぬ折も折櫻木さんの涉來でゆる危い處を救はれて斯物語るも誰が蔭を去年も有馬で助けられ今日又二度の涉鴻恩思へば好都合嬉しいわいなト伏拜む斯と十三郎昨夜の事共語り出るに櫻木も朔左衛門が身を棄てしより父に逢ひ身を償われ名塩に行くとして此處に宿りし始末を告げ跡藏を投殺したる其由も語りければ渚ハ嘆き又喜び「遁れ難き因縁かわれ、數々危難に遭へど不思議に其方に助けられ恙なきこそ嬉しけれト打笑めば十三郎「櫻木が功とハ申せど神佛の守護なくば奈何で此に及ばんや彼の洞九郎が則 芥膳に有馬に逗留すれば現之助殿とだに一所に在ば智略を運らし本望達する時なるにト近き長柄に居るを知らぬぞ最も口惜き〇茲に又梅ヶ枝ハ

霞へだてし花を見る思ひ増すもどかしさ男心のつれなきを人こそ知らね恨みに恨み嘆き
 来て睡みける其夜の夢に優しき女枕邊に来て云ひけるは「妾の永々御恩を受し初草にひなり
 先に姫上むつでが靈に一生男は持まじと夢の裏に誓ひながら遁れぬ縁どの申しながら佐々木
 の君に御意を動し給へば彼惡靈さらでも祟をなさんとすれば一倍其便を得て非人の妻になさ
 んとし否めば溢り殺さんとすれども姫の信者なれば神の御加護に危きを遁れ給へど又彼毒藥
 入りたる白湯を飲んとしたまふこれ皆むつでが死靈の業故に幸くも籠を抜け出で毒を服して
 姫上の御命に代りたれば今、惡靈祟りを爲しあゝ天満にて鳥に見込まれ葉つべき命を男君に
 嬉しくも救へれざれば今死ぬるとも恨みひなして猪名寺同種の梅の木蔭に葬り給ひた
 れば是彼一對の靈墳末代までも名を遺さん忠に死したる功に依り來世の人の身を受ん尙も
 信心愈らす追善供養あそばさばむつでも近日に佛果を得ん告ると見て夢醒めぬ梅ヶ枝の初
 草が忠死を更に感じ憐れみ自分色好み的心をば耻ながらもむつでの崇今はあらじと落着き
 尙現之助のすげなきを苦に病み心地も勝れさりしに其次の日も現之助に忠太夫さへ懇に婚
 を勧むるに斯まで切なる人々の言葉に辭む様もなしと幸ふじて承引ければ旱天に雨を待得た
 る一家の喜び大方ならずさらば先母をせを誘ひ來れと忠太夫を名植村へ遣はすに次の日早
 歸り來て「何共はやひよんなと朔左衛門へ頂いた黄金を失くして幾玉なる星の池へ身を投し
 が死骸を送つて來たれども十三さまも落さず其夜から御行衛知れず櫻木様の又別に身の代
 が調ふて其次の日歸へられたれど一人で家も持れぬと朔左衛門の吊ひを濟して何處かの親
 をば尋ねると出て往れ此女中の行衛も知れず残るものは彼處の門に落ちて有つた此給委佐々
 木現之助と書てあり人殺しか盜賊か誰が落した物やら知れず拾ふて置て櫻木殿に見せられた

びつくりし此の人へ落さすの浮子で私と従弟同士仇討に出てござるを仇の方から反り打にせ
 うとて尋ねる人相書私か賞ふと云ひながらそくさとして忘れておいて今に取にござらぬと
 佐平次と云ふ近所の者が子細を語り見せたのを浮用心にもなる事と無理に借て参りましたが
 眞に善く寫しました是でも偽の婿様でないとは分明なれど母の浮行衛が又知れぬ様に
 なつたのはさて本意なしと云ひければ左門も驚き現之助も憂ふるものから幾代等と謀し合せ
 しとあれば母の居るも使よしと思ふは若氣の過失なれば人情に於ては奈何とも仕難し○與
 之吉が爺に死れし嘆きは讀者察し給へさてしもある可き事ならねば如月下旬現之助梅ヶ枝の
 婚禮の盃滞りなく飾るひよなの又一對今年に増たる花婿花嫁百の節句のあさつきなます
 からず契り交す様に長者は此上なく喜びけり津の國の巻に終れど幾代の成行き大仁坊玉木
 が惡の報ひ其他残る話し多く尙仇撃の大場あり凡て筑紫の巻に尽す

霞へだてし花を見る思ひ彌増すもどかしさ男心のつれなきを人こそ知らね恨みに恨み嘆き寂
 れて睡みける其夜の夢に優しき女枕邊に来て云ひけるは「妾の永々御恩を受し初草にひなり
 先に姫上むつでが靈に一生命は持まじと夢の裏に誓ひながら通れぬ縁ど申しながら佐々木
 の君に御意を動し給へば彼惡靈さらでも祟をなさんとすれば一倍其便を得て非人の妻になさ
 んとし否めば益り殺さんとすれども姫の信者なれば神の御加護に危きを遁れ給へど又彼毒藥
 入りたる白湯を飲んとしたまふこれ皆むつでが死靈の業故に辛くも籠を抜け出で毒を服して
 姫上の御命に代りたれば今ハ惡靈祟りを爲しあゝ天満にて鳥に見込まれ棄つべき命を男君に
 嬉しくも救われざれば今死ぬるとも恨みへなして猪名寺同種の梅の木蔭に葬り給ひた
 れば是彼一對の篇墳末代までも名を遺さん忠に死したる功に依り來世の人の身を受ん尙も
 信心怠らず追善供養あそばさむつでも近日に佛果を得ん告ると見て夢醒めぬ梅ヶ枝の初
 草が忠死を更に感じ憐れみ自分色好み心をば耻ながらもむつでの崇今はあらじと落着ども
 尙現之助のすげなきを苦に病み心地も勝れさりしに其次の日も現之助に忠太夫さへ懇に婚
 を勧むるに斯まで切なる人々の言葉に辭む様もなしと辛ふじて承引ければ旱天に雨を待得た
 る一家の喜び大方ならずさらば先母ごせを誘ひ來れと忠太夫を名置村へ遣へすに次の日早く
 歸り來て「何共はやひよんなど朔左衛門へ頂いた黄金を失くして幾玉なる星の池へ身を投し
 が死骸を送つて來たれども十三さまも渚さまも其夜から御行衛知れず櫻木様へ又別に身の代
 が調ふて其次の日歸へられたれど一人で家も持れぬと朔左衛門の吊ひを濟して何處かの親縁
 をば尋ねると出て往れ此女中の行衛も知れず残るものは彼處の門に落て有つた此箱委佐々
 木現之助と書てあり人殺しか盜賊か誰が落した物やら知れず拾ふて置て櫻木殿に見せられた

びつくりし此の人ハ渚さまの浮子で私と従弟同士仇討に出てござるを仇の方から反り打にせ
 うとて尋ねる人相書私か賞ふと云ひながらそくさとして忘れておいて今に取にござらぬと
 佐平次と云ふ近所の者が子細を語り見せたのを浮用心にもなる事と無理に借て参りましたが
 眞に善く寫し申しました是でも偽の増様でないとは分明なれど母浮さまの浮行衛が又知れぬ様に
 なつたのはさて本意なしと云ひければ左門も驚き現之助も憂ふるものから幾代等と膝し合せ
 しとあれば母の居ざるも便よしと思ふは若氣の過失なれば人情に於ては奈何とも仕難し○與
 之吉が爺に死れし嘆きは讀者察し給へさてしも有る可き事ならねば如月下旬現之助梅ヶ枝の
 婚禮の盃滞りなく飾るひよの又一對今年に増たる花婿花嫁百の節句のあさつきなます儀
 からず契り交す様に長者は此上なく喜びけり津の國の巻鼓に終れど幾代の成行き大仁坊玉水
 が惡の報ひ其他殘る話し多く尙仇擊の大場あり凡て筑紫の巻に尽す

明治廿五年五月十四日

印刷



發行所

東京府平民

足立 庚吉

東京府平民

小林 由造

小石川區掃除町三十三番地

發行所

礫川出版會社

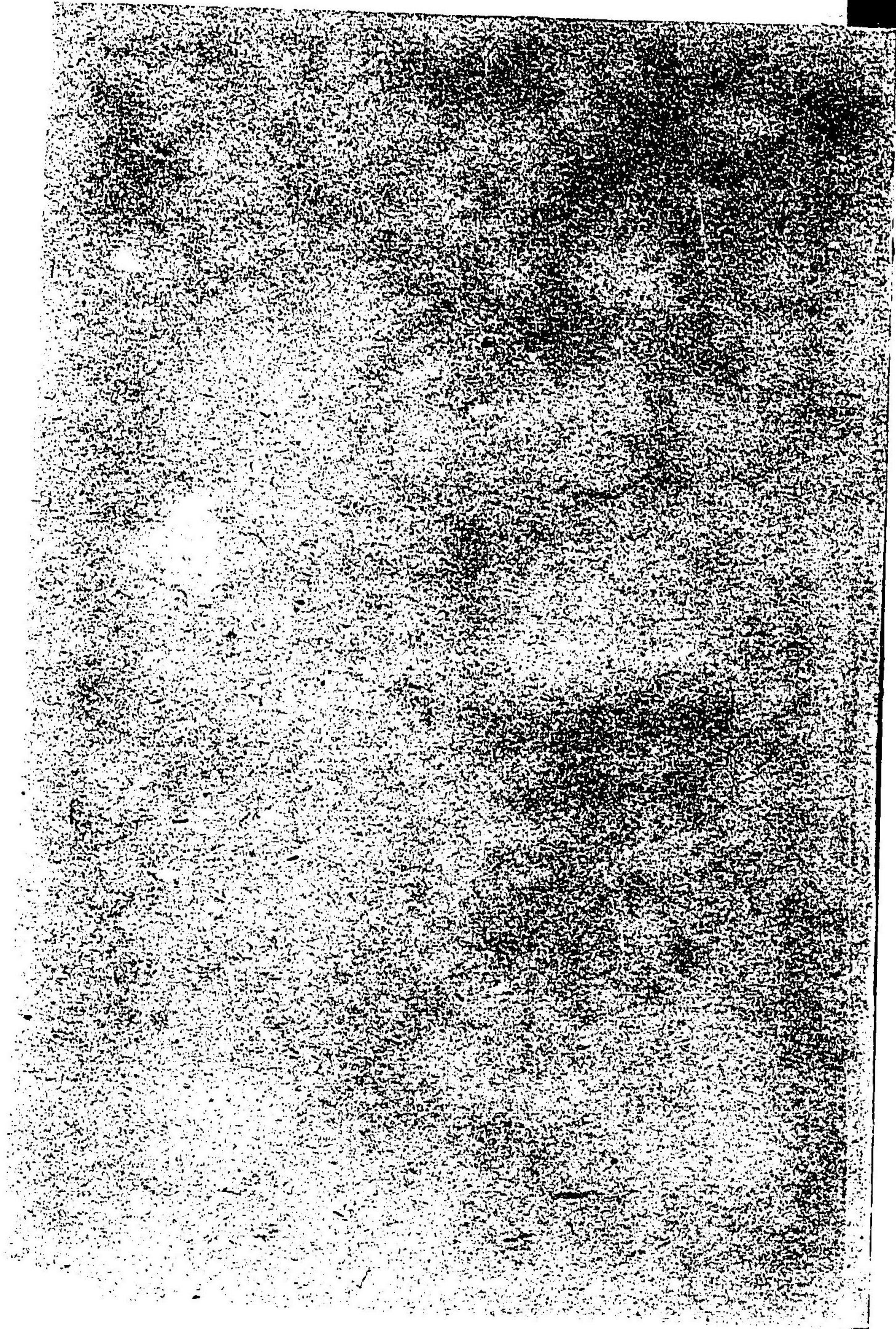
小石川區掃除町三十三番地

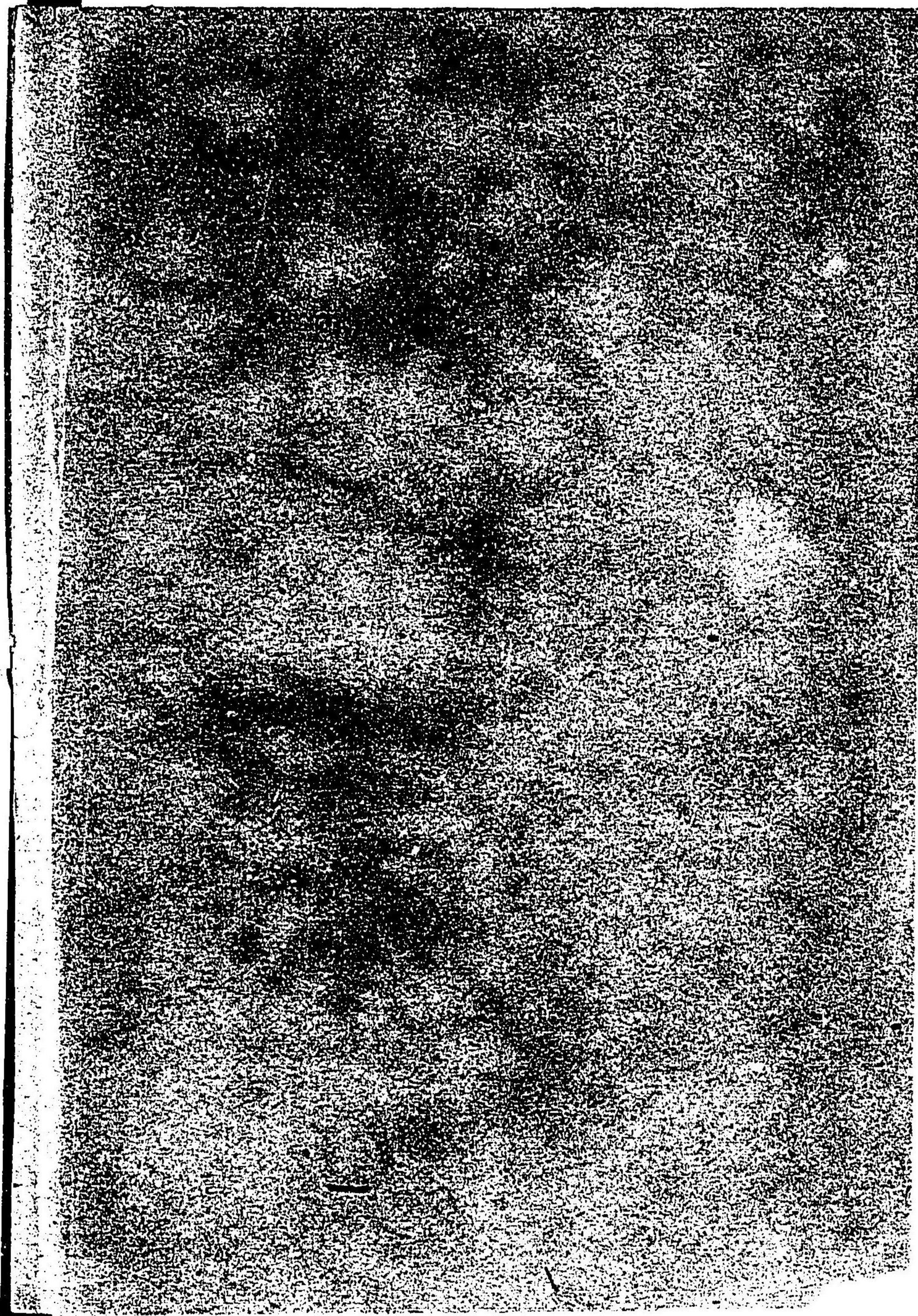
發賣所

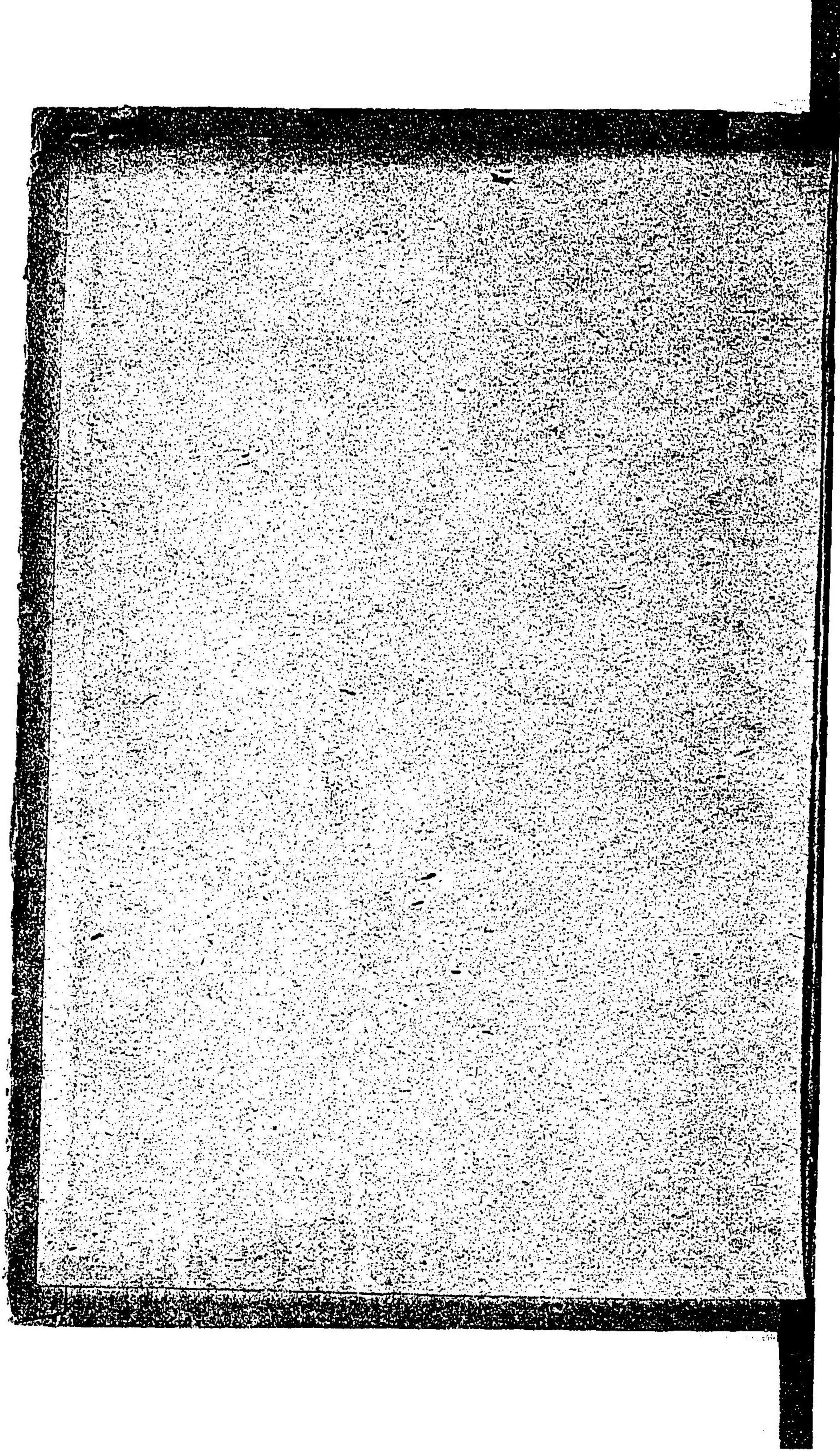
淺草區三好町 大川 鮫吉

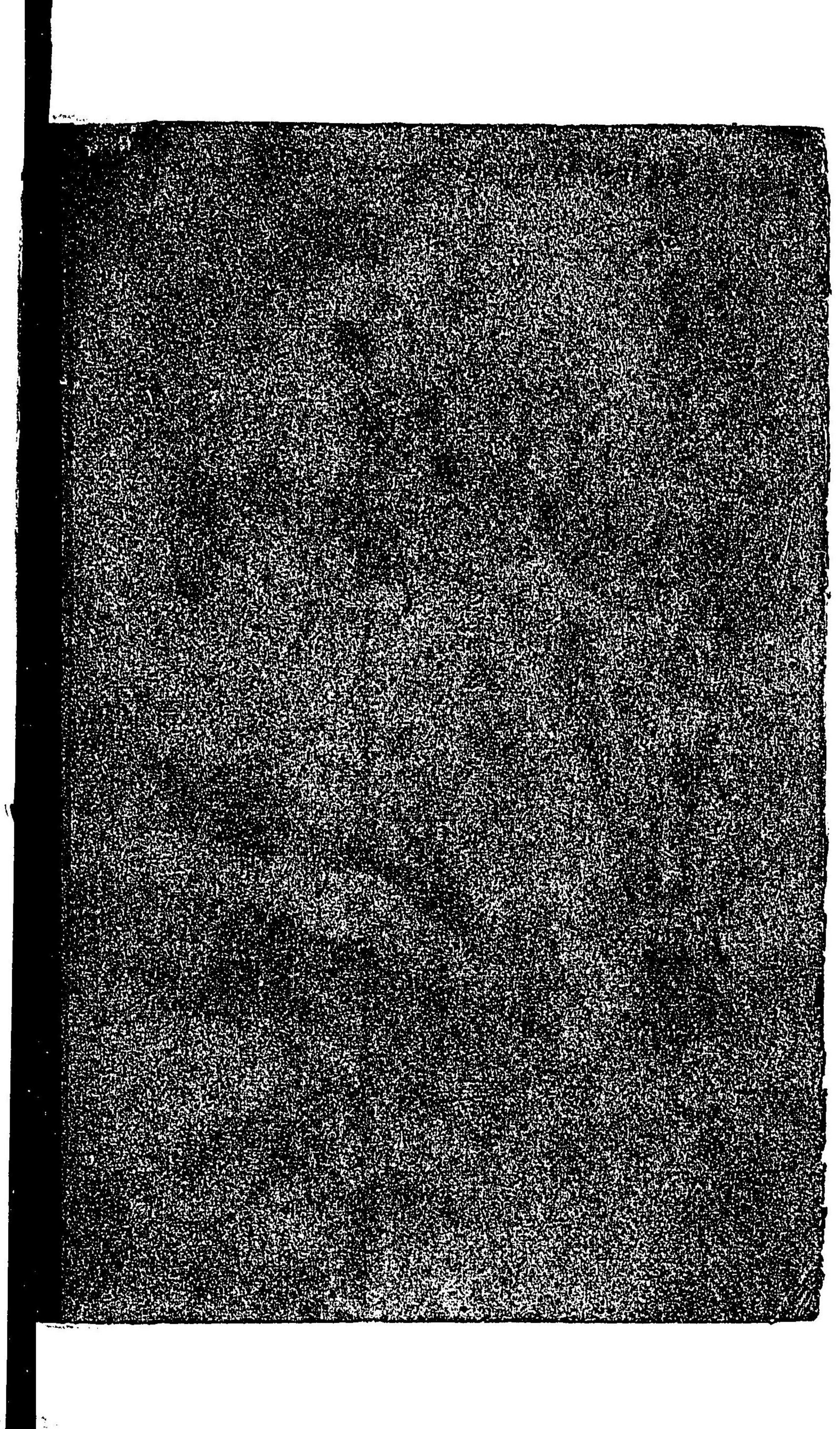
日本橋區本石町二丁目 榮 榮三郎

全區通四丁目 加 我

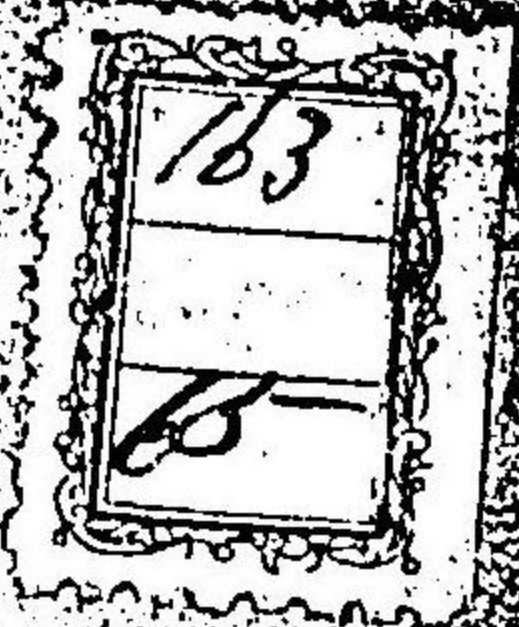








邯鄲諸國物語
完



089293-000-9

特13-397

邯鄲諸國物語

柳亭 種彦

笠亭 仙果 / 著

M25

DBM-0630

